

修 士 論 文 要 旨

学籍番号

第 22GH104 号

氏 名

人文社会科学専攻 (コース：文化芸術コース)

菅原 昌彦

論文題目

弥生中期前葉土器の再検討による水稻農耕集落の成立
－津軽平野を中心に－

本論の目的は、第一に津軽平野における弥生時代中期前葉の土器群について、編年関係及び他型式との並行関係を明らかにすることである。第二の目的は、土器編年の結果をもとに津軽平野における当該期の水稻農耕集落の成立過程を考察すること、そして水稻農耕を営んでいた津軽平野の集団と他地域の集団との関係を考察することである。

土器の分析に当たっては、当該土器がまとまって出土した、青森県弘前市と平川市に所在する6遺跡・計1677点を分析対象とした。この中には報告書掲載外の資料も含まれており、図化作業も併せて行った。こうして集めた資料を、甕・台付甕・有頸壺・無頸壺・類遠賀川系甕・類遠賀川系壺・高坏/浅鉢・蓋の8器種に分類したうえで、形態と文様の属性を抽出し、属性分析によって器種内の類型を設定した。こうして設定した類型について、属性の共通性や遺構内共伴事例を基に、器種内の前後関係及び器種間の並行関係を検討した。

結果として、分析対象とした土器群はⅠ～Ⅲ段階に細分され、Ⅰ・Ⅱ段階土器群が弥生中期前葉に位置付けられ、Ⅲ段階土器群が中葉の垂柳3式に比定された。

この段階設定に基づいて、津軽平野の土器群の分布状況を、平野内部及び隣接地域を含めた広域な視点から検討した。この分析では、当該期の土器が実測図と共に報告されている遺跡を対象とし、発掘調査報告書をはじめ、自治体史も網羅するように努めた。結果として、48遺跡をこの対象とした。

津軽平野における土器の分布状況を検討した結果、Ⅰ・Ⅱ段階においては平野縁辺の丘陵部と低地部の双方における土器の分布が見られ、垂柳3式段階においては低地部に集中して分布する様子が見られた。なおⅠ段階と比べてⅡ段階ではより低地部に土器の分布が偏る様相が見られ、垂柳3式段階では低地部の中においても土器の分布域が拡大する様相が見られた。これは垂柳遺跡とその周辺域に顕著であった。

隣接地域における土器の分布状況については、段階的な分布の変動が見られた。まず津軽・下北半島については、この地域の土器が津軽平野内に恒常的に組成することが分かった。米代川流域・能代平野北部については段階的に分布が見られなくなり、三八・上北地域では段階的に分布が見られるようになることが明らかとなった。

このような土器の分布状況から、津軽平野ではⅠ段階に平野低地部の小河川や台地を基盤とする立地単位へ集団が進出し、水稻農耕集落が営まれたと考えられる。そしてこれを核として段階的に集団が低地部へ集中し、水稻農耕集落が成立したとみられる。垂柳3式段階では、集団の大規模化や水田経営の効率化を背景として、各立地単位において集団活動領域の拡大または移動があったとみられる。

津軽平野の集団と他地域の集団については、まず津軽・下北半島とは恒常的な関係が維持されており、人・モノの移動があったことが想定された。米代川流域・能代平野については、段階的に関係が希薄化したことが想定された。三八・上北地域については、奥入瀬川上流域の集団を介して、Ⅱ段階以降に馬淵川流域の集団と関係が保たれるようになったことが想定された。この集団を通じて、時には遠隔地の集団との接触があったことを指摘した。

以上のことが明らかになったものの、津軽平野における集落・生業域の具体的な様相や、地域間関係の変化の背景に対する説明が今後の課題である。